

財務省今昔物語

第7回

財務総合政策研究所主任調査官 寺井順一

アラン・シャンドと大蔵省の銀行実務教習

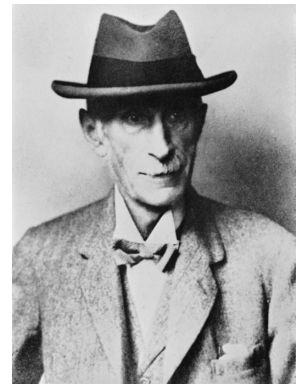
明治初期の大蔵省行政に関わった外国人としては、造幣のウィリアム・キンドルやウィリアム・ガウランドなどが知られている。ここでは、銀行実務教習において特に功績があったイギリス人銀行家アラン・シャンド (Alexander Allan Shand, 1844-1930) について紹介する。

大蔵省の銀行行政については、明治4年以降紙幣寮において、紙幣の流通・新旧紙幣の交換事務とともに、政府の勸奨によって設立された為替会社 (bank) などの営業管理を行っていた。しかし、当時は監督する側の大蔵省に銀行実務に通じた専門家がなかったため、5年10月、アラン・シャンド (当時28歳) を紙幣頭の書記官として雇用し、銀行簿記・会計その他の近代的な銀行業務について指導に当たらせた。その後も、7年4月、紙幣寮内に「銀行学局」を開設し、シャンド等の指導の下に、官吏10名に対して経済学の基礎から銀行論、簿記に至るまでの特訓を行なっている。また、8年には「銀行学局」の組織を拡充し、官吏のほかにも国立銀行などからの自費通学生を受け入れた。

一方、当初期待された為替会社の育成は失敗に終り、政府は「国立銀行条例」(明治5年) を制定、さらに条例を改正して国立銀行が正貨準備なしに銀行券を発行できることとした。この改正によって国立銀行の設立は容易となり、

銀行数は急増する。監督する側でも営業する側でも銀行実務教習が急務となったのである。

シャンドは、明治10年3月、西南戦争における経費節約のため解雇され、11年3月には帰国の途についた



晩年のシャンド
(土屋喬雄「シャンド」より)

(西南戦争の戦費が嵩むとの見通しの下に、この時多くの御雇外人が解雇された)。しかし、在留期間中に残した業績は大きく、彼はわが国初の銀行簿記のテキスト『銀行簿記精法』(明治6年) を著わし、最初の銀行検査 (第一国立銀行) を行なっている。検査を受ける立場にあった渋沢栄一によると、シャンドの検査は綿密で厳格極まりないものだったとされる。

ところでシャンドは、横浜で銀行の支配人をしていたことがあったが、その時彼の身の回りの世話をしたのが、少年時代の高橋是清である。この出会いは、やがて大きな意味を持つことになるが、高橋はシャンドの人柄について、親切、丁寧、篤実、綿密であり、典型的な英国流バンカーであったと回顧している。

さて、その後の大蔵省の銀行実務教習については、明治10年2月、銀行課（同年1月紙幣寮の廃止によって設立）内に「銀行学伝習所」を設置、また、12年6月の閉鎖後も、15年2月からは「銀行事務講習所」を設置し、簿記中心の教育が行われた。「伝習所」の入所者たちは、やがて自らが教壇に立ち、銀行課の職員のほか、銀行行政に関係する地方官吏、銀行・会社からの派遣職員の指導も行なつたとされる。「講習所」は19年3月に閉鎖されたが、この間の入所者403名に対し、卒業生はわずか43名だった。記録にも「学科ノ益々高尚ニ趣クト試験漸ク厳ナル」（『明治財政史』）とある。銀行課指導者の教育はまことにシビアだったのだろう。この記述からも、シャンドの影響が良き伝統となつて受け継がれていたことが推測できる。

アラン・シャンドと大蔵省との接点については他にもあって、彼は日露戦争の戦費調達経緯に、間接的にはあるが関っている。

明治37年2月に始まった日露戦争では、戦費が膨大となり、国家財政を大きく圧迫することとなった。その直接戦費だけでも約20億円、37年度の一般会計歳出決算総額が2億5千万円規模であったことから、その膨大さがわかる。

政府は、戦争に備えて早々と外債募集の準備を進め、高橋是清のイギリスを中心とする募集活動によって、講和までに約7億円の外債が調達された。高橋の渡英は、明治31年、37年、38年と再三に及んだが、この時、パース銀行のロンドン支店副支配人となっていたシャンドが彼の良き理解者となり、外債発行の実現に向けて手助けをしたのである。

その経緯をあらためて辿ると、まず、明治31年2月、横浜正金銀行副頭取だった高橋は、外

債募集のためにイギリスに渡つた。高橋は旧知のシャンドに、ロンドンでの外債募集の見込みについて意見を聴いた。また、パース銀行の幹部やロンドン商業会議所会頭などを紹介してもらう。

次いで、日銀副総裁となった高橋は37年3月、再びロンドンでの外債募集を試み、シャンドに数名の資本家等と引き合わせてもらう。そして、或る日、晚餐会で偶然に臨席したアメリカのクーンロエブ商会首席代表シフが、高橋の話に興味を示すことになる。その時の模様を記した『高橋是清自伝』には、「翌日、シャンド氏がやって来て、パース銀行の取引先である銀行家ニューヨーク、クーンロエブ商会のシフ氏が、今度の日本公債残額五百萬磅を自分が引受けて米国で発行したいとの希望を持っているが貴君の御意見はどうであらうかといふのである。私はシャンド氏の言葉を聞いてその余りに突然なるに驚いた」とある。

アラン・シャンドについては、今日でも、土屋喬雄著の『シャンド』（昭和41年、東洋経済新報社）が最もその詳細を知り得る文献である〔写真は同書より転載〕。この伝記によるとシャンドは、「銀行学伝習所」を去つて後、祖国イギリスでパース銀行など2つの銀行に勤務し、取締役を最後に退任、昭和5（1930）年に85歳で死去している。

シャンドが高橋に宛てた書簡には、「だんだん老境に入れば入るほど日本が恋しくなる」と記されていた。日本で病死した愛児のこともあっただろうが、自らの実務経験が高く評価され、一つの国家と国民のために持てる技能を存分に発揮できた壮年期の思い出が、そうした言葉に繋がったのだろう。